オベリン年代記最終章

セス

オベリン年代記最終章　　セス著

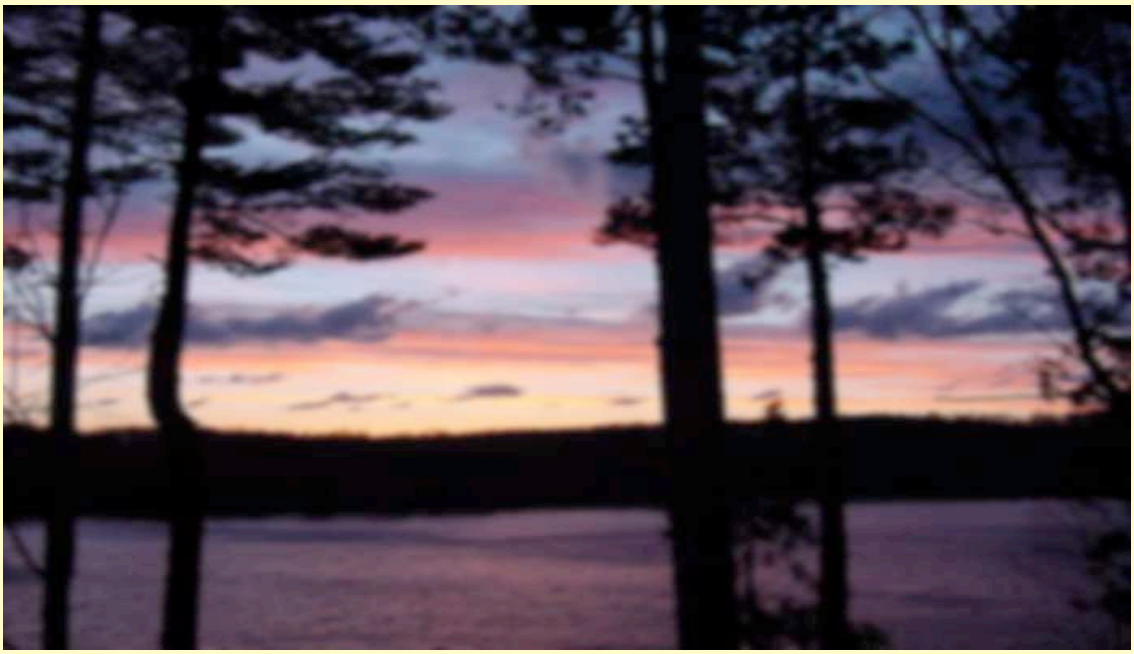
序

御関係各位

貴殿がこの書を読んでいるのなら貴殿は即ち我と気付いているのであろうが、この書に込められし魔力を恐れることなかれ。之は殆ど無力なり。嗚呼、皆が我をセスと呼びしことさえ忘れかけていた。貴殿の瞼に映る我が意気盛んな若者と観えたとしても愚かなりと責めぬことを望む。我は容貌より遥かに年経ている。実のところ我は我自身を我が世界の魔法と運命を支配せりと考えていた。最早かように愚かな過ちもなし。

大凡、我は煌めきと正義の理想に満ちし自らの巧緻天翔るに酔い、またこの大地の豊饒なる造物が示す馥郁たる内実に満たされ過ぎて育ってしまったのだ。何れにせよ、渦巻く出来事は瞬く間に御すること能わずとなり、我が世界と我が敬愛せし人々は去り逝きぬ。悲劇なること其は必定。

我は「始まり」から話し進めるべきなのだろう。其が最良の場所なるが世の常。然り、されど我は言い換えよう。我は「終わりの始まり」から話し進めん、と。恐らく我は我が朋輩達の死の語り部となろう。国王オウスチン、彼の気鋭の子息、国王イアンを前章に。されど今、消えつつある我が魔力の筆が急を告げる。先を急がねば。其がありしままに。



第一章

始まりは常日頃と変わらぬ日なれど、むずがる臓腑と頭蓋の鈍痛が何事か只事では無い兆しを孕んでいた。我が水鏡は素晴らしき微睡みより我を覚醒させるに足る何物かに粟立っていた。我は其らに導かれるままに詞を口遊み、幻夢へと誘われた。有触れた朧げな混濁は突如として清澄透明となりぬ。生ける死屍の群れの只中に悠々と立つは我が生涯随一の強敵、かつての生者にして今や死霊となりしプルウグならん。我は我が視野を広げんともがき彼の正確な所在を確かめんとするも、彼が故意に自らの結界呪法を解いたのだ、と悟った。彼は自ら発見されることを求めたのだ。とりわけ彼の魔力が最強となるであろう場所に於いて。彼は何事を企てようとしていたのか。我は惑えり。

彼は我を戦へと誘っていたのか。彼は邂逅を望んだのか。不明なままに我はその何れにも備え身支度を始めた。我が彼の所在を検分するべく専心する前にも答えは明らかとなった。彼は我を探していたのではない。彼の企ては遥か面妖なるものであった。

彼等の流儀に則り、謎なるベインが影より出でてかつて全ての人々に対したのと等しく尊大にして不敬な素振りで冥府の主に対峙していた。言うまでも無くプルウグが動じることなどなかった。我は暫し立ち尽くしベインの首領と郎党たるドルイドが湿地より沸き出でて彼の主の周囲に群れ成す生ける死屍の軍勢に立ち向かわんとするを眺めた。

瞬く間のことであった。死霊が怒りに指を微かに震わすことなくともベインの刺客共は餓えた死屍共の餌食以外の何物でもなかった。遥か昔我が彼を鬼籍へと追い遣って後かくも強大な魔力を持つに至れりとは。我は愚鈍にも古の魔術を以てこの者の亡骸を探し求め蘇生せり降霊術師にして不届きな愚か者共を探し出し罰を下さんと我が心に刻むのであった。何れにせよ彼等の支払し代償は余りにも高価なり。

〇何処とも知れぬ墓地にて邂逅する死霊のプルウグとベイン共

　ベインの首領:　ベインは死霊を発見せり

〇死霊のプルウグ、答えて曰く

死霊のプルウグ:　おおそうか？　其れは興味深きこと。我思うに汝が発見されておるのだ

死霊のプルウグ:　分からぬか？　我は汝等を待っていたのだ。

〇生ける死屍共がベインを襲う

死霊のプルウグ:　我が生ける死屍共に命ずれば汝等はプルウグを恐れようぞ！！　ははははは！

〇程なく死せるベイン

　ベインの首領:　有り得ぬ！

〇プルウグ、愚かなるベインを嗤い、幽冥の徒となりしベインの首領答えて曰く

死霊のプルウグ:　あはははははははははあ、ベインを恐れよとは・・真に片腹痛し

　ベインの首領:　ドミヌス来りなば、彼が餌食にしてくれよう

第二章

我は我が椅子に背をもたれ我が唯今目撃せり事象を黙考す。プルウグは自らその身を曝しベイン共が来たりて彼を捕らえんと試みるを嘲るのだった。我は従者を遣わし王を差し招かんとす。之を見るのが我一人とならぬように。我はプルウグが墓苑を征し彼が愛玩する蝙蝠を撫でるのを見詰めた。之が戦の緒戦であることは必定。彼はベイン共が彼の元への来攻を決して止めぬと知らねばなるまい。彼等は彼の頑な昏き兵士共の護りに弾き飛ばされん。彼等は其れと為し、プルウグは一人また一人と彼等を倒して行った。我が之を気に病み始めたとしても仮にも彼がかくのごとき威容を以て我の元へと来りなば何が起ころうか。イアンは我が肩を叩き彼が龍石の指輪を揮う限り死霊は寄付けないのだと我を得心させた。

水鏡の輝きの中にも、我が退けて久しい形姿が闇の中より出現せり。ベインの一味となりし、如何に傲慢に過ぎようとも手練なる魔導師が現れたのだ。プルウグでさえ彼の手から解き放たれし魔力を感じたであろう、彼が来たれり。彼は囚われの身となった後甚だしき変容を遂げた。彼の肌は荒れて白く、彼の眼は鍛冶場の炎のごとく燃えていた。魔力を孕んだ黒衣に身を包みぬばたまの黒魔術の顕現に因りプルウグの生ける死屍共を寄せ付けなかった。

其れは瞠目すべき大いなる眺めであった。二人なる魔道の戦士が戦場にて互いに向き合えり。半時間以上もの間ドミヌスはエルドリツチ式呪法による苛烈なる戦慄の稲妻を以て死霊の盟主を痛めつけることが出来た。されど殆ど何の前触れも無く、プルウグは陽気な笑みと共に彼の真の魔力を自らに疑念を持たぬ魔導師の上に解き放ちこの魔導師とただ戯れていたに過ぎぬのだという事を知らしめた。

彼の精神は安定を欠いていたものの、依然として如何に優位に立ちあらゆる抵抗を粉砕するかの術に通じたり。かくのごとく、事は終わり、其の名をドミヌス、全オベリンに荊なす暗黒面は去りぬ。

イアンと我は互いに信じられずに見詰めあった。我等はこれ以上の何を望めると言うのか。いや望めまい。プルウグは本当に我等が地上よりベインを永遠に葬り去ったのか。其が真実なりとしたらば彼は今やどれほどの業を為し得るのであろうか。我等が感喜は即座に恐怖へと転じたり。次に来るべき事は何か、我が技量に無謀なるを課し痛苦に果てようとも、この収穫を待つ豊饒なる世界を護るべし。

〇墓苑にて向き合う死霊のプルウグとベインのドミヌス
ベインのドミヌス:　死人を探しておる

〇辺りには生ける屍の群れ
　死霊のプルウグ:　而して汝は我を探り当てた

〇ベインにも勝る尊大さで対峙するプルウグ
　死霊のプルウグ:　よしよし、ドミヌスは遂に我を発見せり。
　なんと喜ばしいことよ。

〇ベインのドミヌス答えて曰く
ベインのドミヌス:　我がベインは死霊如きには倒せぬ

〇更に尊大に答えしプルウグとドミヌスの宣戦布告
　死霊のプルウグ:　嗚呼、なんという・・汝の首領今は亡し、
　ベインは終わりぬ。
ベインのドミヌス:　我等は汝を鬼籍に加えねばならぬ。

〇ドミヌスを見透かしつつ煽るプルウグ
　死霊のプルウグ:　よかろう。されど勘違いな哀れ貧しき魔導師は
　どうなろうか？

ベインのドミヌス:　勘違いだと、汝に真の魔力を示さん！

〇プルウグ、答えて曰く
　死霊のプルウグ:　さても、見物よのう、来れ！

〇開戦
　死霊のプルウグ:　彼等は懲りるということを知らぬな・・・

〇互いの消耗は激しくドミヌスは既に瀕死、されどー
ベインのドミヌス:　我は負けん！

〇終戦
　死霊のプルウグ:　汝は既に負けておる（笑みを浮かべ）プルウグ
　を恐れよ！
ベインのドミヌス:　我は影となりぬ

第三章

全てが終りし時、プルウグは一陣の煙の中に消え入り、屈託無き歌声と哄笑は風に消えて逝った。我はしばしの平穏を得んとて我自身の守護結界へと入りぬ。たとえプルウグが我と我が主の元へと来たらんとて、我はドミヌスのごとき容易い獲物とはならぬ。数週の後、我は我が水鏡にかの死霊の如何なる兆しをも看取ることがなくなった。彼は我の観察と認知を避ける結界へと帰りぬ。我は我が水鏡の縁辺がぬばたまの夜のごとく黒変せるのに気付いた。其は暗黒が世の縁辺に進入せし時の徴なり。我はその意を其が手遅れとなるまで知り得なかった。

その代わりに、幸運の恩寵であろう、森林の多くの警備官と生物の内の一人がまた一つの王国の敵を浮かび上がらせるに足る報せをもたらしたり。狂えるオウレイルがあおによしオベリンの都の南の洞穴を次なる邪悪な企ての根城としていたのだ。町を脅かす彼のまた一つの友軍は専ら蜥蜴人なり。我等が我が生者と共にこれなる災禍より回復せんとて多大なる繃帯を要する事必定。されど、何やら妙なことが我が身に起こっていた。それは我がプルウグの彼の敵をあしらう術に対する驚嘆を未だ拭えぬためか、また我が我自身の戦に落ち着かぬためなのか知れず。なんとか、数年を通じてオベリンの都の臣民が十全に遣り過せた後、我はここで唯今其に終止符を打つべしと結論せり。我はオウレイルに対峙するべく城を後にした。

彼が我の来れるを見ることは無かった。我は我の存在を気取られる事無く彼より数歩の地点まで接近することが出来た。我は彼に呼び掛け之の馬鹿げた事を止めよと諭した。彼は我に向き直り引き攣る嗤いを浮かべながら射るような冷たく厳しい眼差を向けた。そして即ち彼は攻撃を始めた。

凡そ古書なるものには勇猛なる魔導師や誇りに満ちて立つ戦士が雷の電撃を受けて彼の胸は激しく脈打とうとも顔を顰めることなしと描かれる。彼の顔には無慈悲なる決意が刻まれ電撃は滝より落ちて彼を打つ清水程のものでしかないと観える。我は神話を訂正しよう。雷撃は極めて痛烈であり唯の一撃にて人は全ての末端の感覚を失なう。其のような力に撃たれた後にはあらゆる呪法をかけ得る熟練の手が奪われている。それこそが我が幾度となく行ないし術策なり。オウレイルが何故に悲痛なる終末の待つ戦いを選択したのか、我には想像がつかぬ。戦いの間、彼はこれら全てが如何に過ちであり我が彼に許しを請うべきであるかと自らに呟き、合間に我が血脈を呪っていた。我はそれらを受け流し我が仕事を終えた。明白ではあるが我は遅ればせながらも正義を為さんとしていたのだ。

我はこの狂える魔導師の焼け焦げ煙り立つ亡骸を見下ろし、その痛々しく捩れた形姿に哀れなりと感ずる他はなかった。我は為すべき事を為したのだと自らに語りかけた。我は彼の革袋に皺くちゃになった紙片を発見せり。我はその意味を解読せんとし僅かに其を成し得た。屍が闇の中で哀歌を歌わんとする中、何ごとか如何にラグナロクは迫っていたのかそして如何にして道化師が荊の冠を盗もうとしたのかと。我はそれを狂気の男の閑話であるとして退け、墓穴を掘り始めた。

我は地中深く穴を穿ち、彼の亡骸を蹴り入れながらも、我が心は彼の最期の詞を繰り返し紡ぎ滞ることが無かった。我が遂に点を結べし時には既に遅過ぎた。我は呪法を操り今まさに我の死せる友の子息である、友の霊魂が極楽浄土に浮んで逝くのを見送った。我は如何に盲であったのか。

〇互いに激しく電撃を撃ちあうセスとオウレイル
　オウレイルが雷撃を放ち、セスが撃ち返し、またオウレイルが撃つ

〇ふと手を止めた両者、オウレイルは既に瀕死である
オウレイル:　この老いぼれの愚か者が、汝が何をしたか分かっておるのか！！！

〇セス、答えて曰く
　　セス:　汝の恐怖による支配は終りぬ。虚無の支配者よ！

〇セス渾身の雷撃がオウレイルを焼き殺す

第四章

我は殆ど頽(くずお)れそうになりぬ。其(それ)は真実なり。真の敵は常に我等の中にいたのだ。我(わ)が絶望の涙はやがて去りゆくまでの我に残された現在からの唯一の逃げ場なり。

〇城内の王座の間、宮廷道化愚者のココ贈り物の包みを持って国王イアンを待つ
愚者のココ:　ご機嫌よう御座います、国王陛下
国王イアン:　おう、贈り物か

〇国王、喜こび曰く
国王イアン:　わしにか？
愚者のココ:　御意！

〇包みに歩み寄る国王
愚者のココ:　ささ、開けてください！
国王イアン:　さても贈り物とは愛い物よのう

〇包みを開けた瞬間爆発、国王は即死
〇嗤う道化師に怒りに身を震わす死人となった国王
愚者のココ:　はははははははは！
国王イアン:　おのれ！

国王イアン:　何故だ、何故お前が
愚者のココ:　もう、馬鹿なことに付き合うのは十分だ

愚者のココ:　魔導師評議会(ソオサラアズカウンシル)は我が創設したのだ、そして今こそ終りにするのだ
国王イアン:　汝愚か者を信ずる事なかれ、と知るべきであったな

愚者のココ:　さらに、指輪は我にあり。
国王イアン:　汝には受け継げんぞ！
愚者のココ:　今や、私が王国を支配出来ぬとしたら、いかなる者にも出来ぬなんと片腹痛きこと！！！

国王イアン:　汝は真に狂っておるぞ！
愚者のココ:　知っている

〇愚者のココ、夥しい頭数の黒龍を召喚
国王イアン:　止めんか！

第五章

我はこの狂気の化身と対峙して復讐を叫んだ。彼の物腰は穏やかで我は彼の狼を前にした羊以上のものでは無かった。彼はくすくすと嗤いながら陽気に跳ね周り、彼に理由を問うたものの無駄であった。彼は古の魔術を盗み今やこの世界を盗まんとしている。我には唯一度好機があった。もしや我が瞬時に且つ無慈悲に彼を倒すことが出来たなら、全ては終ったはずなり。我は失敗した。

霊魂が肉体より遊離する時には混乱する感覚があった。色彩は病める黒と白へと褪せて行った。肉体は貴殿の足下に折り重なり貴殿は空虚で怯弱なりと感ずるだろう。巨大な爪が我が胸を切り裂き霊魂をその留め具から切り離さんとする時、我は龍の臭気が我が鼻腔に届く暇も無いことに半ば安堵した。

自らの黒魔術に重々に浸り来た故、我はかつてココと呼ばれたこの愚者と交信することが出来た。我は彼の打ち振る腕にあたかもペツトの如く繋がれり。彼は国王オウスチン崩御の影で宛ら人形師の如く糸を操っていたのだと種を明かした。彼が女王レイエルを傀儡とするのは容易かった。何故なら彼女の魂は取り掛かるに十分なまで堕落していたのだ。辺境より彼の下へと届きし切り札はベインの襲来なり。我は彼等は最早脅威ではないと語りかけたが彼は既に遥かな地点まで歩を進めていた。彼は謡った。「もしもベインが彼等の矛先を我の他へと向けていたなら、我は之国を征服し魔導師評議会の首領として支配することが出来たのに」と。彼は我がプルウグを倒した事に感謝しながらも我がイアンを生き永らえさせた事を呪った。我は我が水鏡を覆い尽くせし昏き潮は真に最暗黒の龍族の羽音以外の何物でも無かったかと思えり。

それから、彼と我、我等は全国土を共に辿った。行く先々で彼は次元の扉を開き不浄の獣を放ち視野に入る物全てを荒廃させた。一つ、また一つ王国の全ての建造物は龍の炎に焼かれて行った。その間中、ココは嗤い下品な冗談を口走った。彼の心は之国が今やかくの如くあるように崩壊していた。

カルスの島が焼かれたる時には我は我がエエテル体がその熱きを感じ得ぬことを喜んだ。我はこの荒廃を声高に嘆かれぬ事が哀れであった。ココが黒龍を蹴飛ばし岩を踏み潰さんと指図せんとする時、我は我の視界の片隅に何物かを捕らえたり。其なるは輝ける巨大な蜘蛛の女王、ロルスの紋章なりて、墓苑の廃墟の黒き姿の辺りに光芒の円柱を成せり。其は頂点に達するや消えて逝き、残るはただ燃ゆる赤衣が酸性の熱き風に吹かれ散るのみ。我は其が嘆きに打ち拉がれし我が心が見せし幻であれと望む他なし。されど他ならば・・・

〇オベリン市街中央の銀行にて対峙するセスと愚者のココ
愚者のココ:　汝は我と魔力の指輪の事を聞いたか？
　　セス:　汝は我を倒せぬ

　　セス:　汝はただの愚か者だ
愚者のココ:　ただの愚か者だと？有り得ぬ。この老い耄れが（笑）

〇愚者のココ、直ちに黒龍の群れを召喚、即死せるセス

愚者のココ:　は！之は快楽なり！！
　　セス:　・・・・・・・

愚者のココ:　トウララララ！

〇南極のギルドホウルに溢れる黒龍の群れ
愚者のココ:　さらば、極地の負け犬共、我は熱を愛す

〇ギルドホウル（場所不明）に溢れる黒龍の群れ

〇オベリン市街の鍛冶屋を襲う黒龍の群れー
愚者のココ:　鍛冶屋は夜の闇に消えて逝った・・・

〇カルスのギルドホウル中庭に溢れる黒龍の群れ
愚者のココ:　あばよ！
　　セス:　どうしたリバアスガラアジ！

〇スキヤンプ島のギルドホウルに溢れる黒龍の群れ
　　セス:　スキヤンプは陽気な楽しい連中だったのだぞ、汝は心を持たぬ！
愚者のココ:　否！

〇都のギルドホウルに溢れる黒龍の群れ
愚者のココ:　見よ！最早マリの負け犬共はいない！
　　セス:　かの勤勉実直なるマリレンジヤアズは何処へ？何時になったら終るのだ

〇ラグナロクのギルドホウルに溢れる黒龍の群れ
　　セス:　ラグナロクの予言は成就せり
愚者のココ:　これこそがその世界の終末なり。我は気分がいい。

〇都の大神殿に溢れる黒龍の群れ
愚者のココ:　これらを蘇生せよ！

第六章

我はココが大神殿を破壊するのを見詰めていた。やがて我は漸(ようや)く彼の支配を抜け出(い)でて我(わ)が隠れ家に身を潜めることが出来た。最早彼は我(われ)の事など気に留(と)めずと思えり。

この世界が過ぎ逝き、我もまた・・・消え逝かん。他なる世界がかくのごときぬばたまの暗黒の運命に堕ちて逝くことなきよう、神々に祈るのみ。恐らくは彼等には我ごときの及ばぬ叡智と洞察があろう。我は我(わ)が魔力の筆に専心しつつもココの行き着きし終(つい)の園を眺めている。我は彼に警告を試みたのだ・・一度(ひとたび)龍共の頭数が満ちたなら、指輪の有無に関わらず彼等に抗す事能(あた)わず、と。彼が耳を傾けようはずもなく、龍共は為すべき事を為せり。龍共はまた一つの世界の破壊を夢見て眠りへと戻る前に大地を食い散らかし、破壊し、その後には打ち捨てられし荒れ地が残るのみであろう。

我はと言えば、何方(どなた)かに読まれる事を念じてこの世界の歴史を書き続けんとしている。いざ、この仕事が終わりし後は我が最後の力を以て理(ことわり)を解(かい)する者の手へと落ちることを祈念しつつこの書を次元のエエテルに投げ込まん。我はオベリンの勇敢な臣民達を忘れぬ。皆の夫々(それぞれ)に語るべき物語があった。時が許せばそれらの全てを貴殿等のために書き記(しる)さん。我は敢えて言う。ここでの生は十分生きるに値するものであったと。ここに彼等全てに対する我が失策を詫(わ)びよう。いつの日にか許されんことを。
いざ、さらば。

貴殿との善き邂逅に、

セス
大魔導師(グランドウイザアド)にして無分別なる愚か者

解説

王立通訳　マリレンジャアズの浪人某

セスのトオム、我等の黙示録

この文書はオベリンの宮廷魔導師セスがその魔力を用いて書き記した「オベリン年代記最終章」なる古書の全訳である。
我々が三々五々そこより去ってから如何にしてあの世界が終末を迎えたのかという顛末が描かれている。それは黄昏に向かうオベリン世界の物語であり、確かにその世界で共に生きた我々全ての黙示録でもある。

凡そ黙示録的なる書をそれと決する物は書き記す作業を急かす言葉の奔出であり切迫した筆致である。このことは過去に多くの文芸評論家によって指摘されているが、かの新約聖書「ヨハネの黙示録」に於ては第三の段落で「時が近づいているからである」（For the time is near、「最早時は無い」とも訳される）として切迫した状況を暗示している。セスの書に於ても差し迫った危機と巻き起こる事件が彼の予想を超えた速さで進行し彼に残された時間が無いことがその筆致の切迫感を醸し出しており、序文の最期の部分にこの書が如何なる状況で書かれたのか記されている。
原文の文体は大変に入り組んだ装飾に彩られる雄渾なものであり、辞書を片手にそれを読むのならば内容は理解されようとも実際に我々の理解できる文章へと書き写すのは困難を伴う。小生が翻訳を決意したのはここに描かれた基本的な事実だけではなく描写そのものに様々な趣が横溢しており我々も等しく味わう価値があろうと考えたためである。

この書全体は序文と六個の章建てからなり、必要に応じて絵詞を加えて構成されている。序文ではセス自身の生立ちと悔恨を交えつつ導入についての記述があり、第一章ではかつてセスの宿敵であった、死せるプルウグが現れてベインと戦う場面をセスが彼の水鏡（"Scrying Bowl"、本来は占卜師が用いる鉢であり、水に溶かした様々な染料が醸す形姿により千里眼の効用が得られるという。我々が用いた"Orb of Seeing"に近いものであろう）によって観察する様が描かれている。第二章ではさらにプルウグの下へこれまた女王レイエルの陰謀により一時セスから宮廷魔導師の座を奪ったドミヌスがベインの一員としてやって来て戦う様が描かれる。この二つの章を読み絵詞を観る限り、死霊となったプルウグは専らネクロマンシイを術策としているようで、攻撃は殆どアンデツドに任せている。元々プルウグを蘇生したのは何処かの降霊師であるが、いつぞや我々もネクロマンサアなる魔導師を目撃したことがあるので彼がその人物であるのかも知れない。

セスはプルウグはもちろん、ドミヌスの技量をも高く評価しているようだが、ドミヌスはベインの一味に拉致されて何らかの洗脳にあたる行為を施されたということを暗示する記述がある。これが事実とすれば大変興味深い。小生は、ベインが当初王立護衛官にして剣聖のウザク卿を首領とするレツド団を襲った時、重ねてドミヌスを探し求めていたことがあり、ベインは裏でドミヌスと通じていてさらには女王とドミヌスがベインを撃退して見せることで女王の権勢を臣民に印象付けようとしていると考えていた。今回この書によってベインが全く異なる起源を以てオベリン世界を蹂躙しようとしていたことが明らかとなった。

第三章では、前半で前二章の戦いで勝利したプルウグが何故か消えて行き、その後水鏡からなにがしかの暗い運命が王国に迫っていることが見て取れたと描かれている。更に後半ではまた一人の魔導師評議会(ソオサラアズカウンシル)の残党オウレイルの暗躍とセスの決戦の様が陰鬱な描写で記されている。ここに至って破滅の予感はいよいよ濃密なものとなり、第四章では宮廷道化ココが遂にその本性を現し、国王イアンを爆殺、彼が魔導師評議会(ソオサラアズカウンシル)を含む多くの謀略の黒幕であった事が明かされる。第五章ではセス自身がココを討たんとするものの、黒龍を召喚され死した後も彼に捕らえられ、引き回されて国土の破壊と荒廃の目撃者にされた悲哀が語られる。第三章でプルウグが再び消えて行ったことの真意は不明であるが、そもそも魔導師評議会(ソオサラアズカウンシル)なるものはいかなる起源を持つのだろうか。この書の後半でそれが宮廷道化ココの創設したものであることがココ自身の口から語られた以外の記述は無い。ここにその歴史を手短に纏(まと)めてみよう。

ソオサラアズカウンシル（魔導師評議会）はこちらの年代で一昨年後半に結成されており、当初は他のギルドに加盟していた魔導師をも勧誘していた。この辺りの経緯は以下のラグナロクのテロンによる書物に記されている。
http://www.freethinkerssociety.org/ragnarok/teroncouncil.gif
http://www.freethinkerssociety.org/ragnarok/teronfaceoff.gif
またトラクサス僧正の書にもこの記述がある。
ラグナロクの奉ずる教義(ドクトリン)である終末論はこのトオム全体を通じて影を落としておりそれについてのココとセスのやり取りが見られる。またセスがオウレイルの革袋より発見した走り書きにもそれについての記述があると示唆されている。この古書(トオム)の末葉の理解にはラグナロクの書物(ホウムベイジ)を参照することが必要である。
魔導師評議会(ソオサラアズカウンシル)がオベリンの住人に明確に宣戦を布告したのはそもそも、こちらの時間で昨年初頭、南極のアイスダンジオンが何者かに封鎖され、中には黒龍(ブラックドラゴン)が溢れるという事態を発端とする。程なくそれがプルウグの謀ったものであることが判明し、彼は渾沌(カオスリング)の指輪を用いて黒龍(ブラックドラゴン)を召喚、「黒き氷の死(アイシイブラツクデス)」なる儀式魔術を執り行わんとした。これの目的とする所は当時の国王オウスチンの殺害であると考えられる。この呪法はオウスチンを病床へと追い遣(や)り小生はその御様態を気遣っていた。プルウグの呪法の顕現(けんげん)を悟ったセスは水晶髑髏(クリスタルスカル)の回収を臣民に依頼、それを用いた儀式魔術を執り行い

プルウグは羊が原にて義勇軍に討伐された。また彼の郎党であるピイトなる魔導師はアイスダンジオンに篭城していたが、龍石(ドラゴンストンリング)の指輪を装備した剣聖ウザク卿に討たれ、ウザク卿はこれを期に王立護衛官に推挙された。これが「プルウグ戦役(クリスタルスカルクエスト)」である。
さらにグレイルは幹部の一人であったが、彼の妻エデイスを都の楽士(がくし)にして魔導師の詠シユガアが誤って殺害したことを発端として、魔導師評議会(ソオサラアズカウンシル)はオベリン全土を恐慌に陥れ、とりわけ同じく魔導師の組合(ギルド)である啓明結社(エンライテンド)を目の敵とし、主として都の住人を無慈悲に攻撃した。比較的中間的な存在であり盗賊であったブリガンドから離脱せんとしていた女治癒師スウザンブリツジと恋に堕ちた疾風特攻の戦士ステフアンは彼女からグレイルが死せるエデイスと再会せんとして都の墓苑にやって来るとの情報を得、オベリンの臣民は洞穴に潜むオウレイル討伐隊と二手に分かれて義勇軍を編成、これを攻撃、グレイルは死せるエデイスの説得により自ら死を選ぶのであった。これが世に言う「グレイル戦役」である。

グレイル戦役終息後、王国は一瞬平穏を取り戻したように見えたが実は決戦の最中にオウスチンの妃レイエルと通じた悪名高きならず者集団グリフインの刺客(しかく)サムがオウスチンを殺害していたことが判明、我々の勝利の雄叫びは瞬時に嘆きへと転じた。こちらの時間で昨年五月十二日のことであった。オベリンの臣民は喪に服した。レイエルは王位の継承を宣言、グリフイン構成員による国王暗殺によりミンスにある彼等のアジトは召し上げられ黒龍(ブラックドラゴン)が放たれたが、国王暗殺の実行犯サムは何故か不可解なレイエルの恩赦を得て断罪を免れた。当時後の国王イアンはセスと共に放浪の旅に出ており、王宮には新たな魔導師としてドミヌスが就任、彼を付け狙うベインなる集団も出現した。イアンは帰着後女王と激しく争い、やがて臣民は女王派と王党派に別れて戦うことになった。その後の動向、そしてドミヌスがベインに拉致される際の状況については特攻僧侶オイオイ和尚の歴史書に詳しい。是非参照されんことを。
http://oberin.s7.xrea.com/kiso/rtq020902/index.html

セスのトオムを読み解くにはこれらの歴史を踏まえる必要がある。
しかしながら多くの疑問がある。サムは女王とどのような関係にあったのか。小生は王宮の王座の間へと訪ね行った時、サムがただ一人そこにいて女王を待っているのだと言い放ったのを目撃したことがある。さらに魔導師評議会(ソウサラアズカウンシル)と宮廷道化ココの関わりについては「プルウグ戦役(クリスタルクエスト)」後回復した国王オウスチンが主催するカルス島ギルドホウル争奪戦の際、王立通訳として参上した小生等に漏らした御言葉の中にそれとなく示唆するものがあった。次ページ以降の記録を参照あれ。

〇それは準決勝第二試合の前後のこと〇
(King Austin): Ronin X／浪人某（ロウニンエツクス）
(King Austin): Can you juggle?／汝は曲芸が出来るか？
(Telemachos): lol／笑止
(Ronin X): Its nice to seeing you are in well, your majesty.／
お元気な陛下にお会い出来て喜ばしく思います。
(King Austin): My Fool has taken ill.／我が道化は病に伏しておる
(Ronin X): oh／嗚呼
(King Austin): Travis does not juggle.／トラビスは曲芸をせぬ。
(Ronin X): Ill be juggler if you wish, your majesty.／
陛下、仰せとあらば曲芸師となりましょう
(King Austin): I will survive....／我は生き延びる・・・（意味不明）
(Travis): I'm the gaurd not the jester my lord.／
陛下、我は護衛官、道化では御座いません。
(King Austin): Regretfully yes, Travis.／残念ながらそうだのう、トラビス。
(Nabechun): Ronin san kakko E...／（？）
(King Austin): Is there no one that will prance around like Coco?／
誰ぞ、ココの如く飛び跳ね回る者はおらぬのか？
(Ronin X): It is pity, your majesty.／無念で御座います、陛下。
(King Austin): It's not easy being the King.／王であることも楽ではないのだぞ。
(Ronin X): Oh／嗚呼
(Travis): Maybe seth if he drinks enough ale my lord.／
恐らくセスがエイルを強かに飲まば（それをやりましょう）、陛下。
(King Austin): Ah, good point Travis.／嗚呼、トラビスなるほど。
(King Austin): We must give him ale for some prancing.／
我等は彼にエイルを飲ませて飛び跳ねさせようぞ。
(Ronin X): Great idea, your majesty.／陛下、良い考えで御座います。
(King Austin): I thought it might be.／思うにそのようだな。
(Ronin X): I have 50 ale／愚生は５０本程エイルを所持しております。
(Ronin X): ah／嗚呼（セスが次なる競争の選手を連れて戻る）
(King Austin): Ahhh, the rest of the guilds are here.／残りのギルドがこれに。
(momo-f): Hello／こんちわ
(spring): hi King／は～い王様
(sarukiti): hi-／はいー
(King Austin): Seth, if you will do the honors.／セス、汝がその名誉をかけるなら～

(King Austin): Hold please.
(King Austin): Get ready……
(King Austin): And……
(King Austin): Begin!
(Seth): Go!!
(King Austin): Spread out, my subjects. :)
〇次の競争が始まり、選手は離れていった〇
(Seth): :)
(King Austin): Give them room to drop their flags. =)／
彼等が旗を置く場所を開けるのだ（チラーリ）
(Ronin X): :)／ニコーリ
(King Austin): Seth, have you learned to juggle yet?／
セス、汝は曲芸を習ったことは？

(Seth): My Lord?／陛下、なんですと？
(King Austin): Juggle, like Coco.／曲芸じゃよ、ココのような。
(King Austin): The fool has taken ill.／我が道化は病に伏しておる。
(Seth): I do not preform trick SIre.／手品は出来ませぬが。
(King Austin): There is no one to prance and juggle for me.／
誰も軽業や曲芸を為すものがおらぬのだ。
(King Austin): It's not easy being the King.／王であることもまた辛いのだ。
(Ronin X): I was a boomerang juggler, before, your majesty／
陛下、愚生は以前、ブウメラン曲芸師で御座いました（ホント）。
〇突然の告白に言葉を失う国王〇

閑話休題。如何に国王オウスチンがココを寵愛し頼っていたかがこの会話からも読み取ることが出来る。またこの争奪戦はこちらの時間で昨年四月二十六日のことであり、プルウグを巡る「プルウグ戦役（クリスタルスカルクエスト）」終息後のことでなので、既に「グレイル戦役」の期間に入っていることになる。というわけでまさにその頃からココが宮廷に顔を見せなくなったのだということが理解できる。恐らくは表舞台から隠れて傀儡（くぐつ）であるグレイルとオウレイルを操り、「グレイル戦役」を演出したのであろう。
第四章以降に描かれるココの炸裂する狂気は鬼気迫る物がある。恐らく彼は何らかの術を持ち、隙のある人間を操る能力があったのであろう。そのココも最期は自らの破壊と殺戮の生け贄となった。それこそが彼の望んだ楽園だったのかも知れない。

我が友セスとの想い出

小生は都の一等地に居を構える最古のギルド、マリレンジヤアズに所属する戦士であったがギルドの栄華は今何処（いずこ）、全ての住人の最長老チムバは既に去り、我が師ジヨオ・スミスも隠遁していた。小生としても戦士としては未熟、形勢不利と見るや即座に罠に頼るひ弱な戦士であり剣技には通じていない。しかしながらそういう小生も王立通訳として数回に渡り王の主催するギルドホウルの競り並びに争奪戦の運営に参加出来たことは大きな喜びであり誇りでもある。その間セスは機敏な判断で王の手足となっていた。最初に小生が通訳に召喚されたのは都の北の小島にあるギルドホウルの争奪戦の時である。神速傭兵カシユウと快男児テレマチヨスの騎士道精神溢れる息詰まる競走、そして戦いが育んだ熱き友情には大いに感動させられるものがあり、その記憶は今も小生の胸を熱くさせる。が、その時小生が召喚されたのはセスの競走についての説明が余りにも分かり難く、結果として細部の正確さを欠いたため神速傭兵カシユウが万全を期すために小生の確認を必要としたというのが真の理由である。これを以てセスの語り口がやや独善的であると言うことも出来よう。

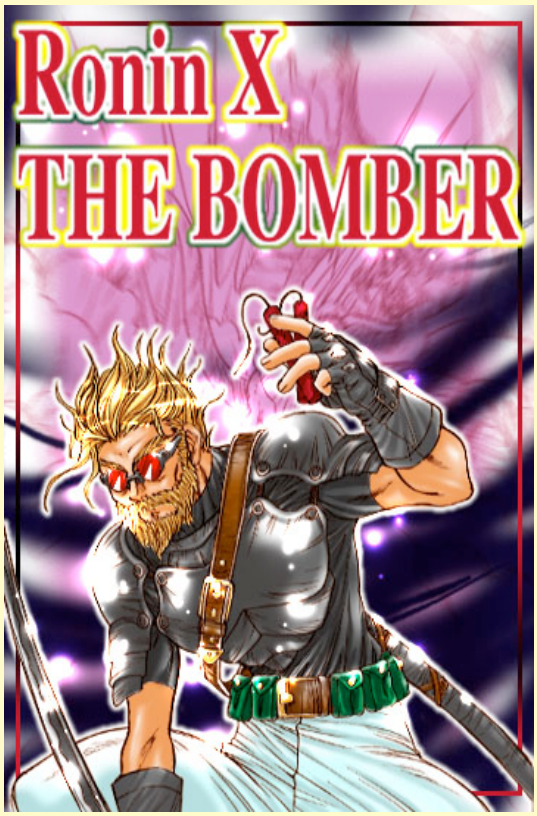
また、カルスのギルドホウル争奪戦には多数のギルドが参加し、白熱の競争が繰り広げられた。古参のギルドであり、渋い構成員を揃えたオメガ。今やこちらの世界で強大な権勢を誇るジエダイ。快男児テレマチヨスの魔導師集団、啓明結社（エンライテンド）。究極の職人集団、鰻屋本舗（ウナギヤ）。古参にして高位の戦士を擁する逆しま工場（リバアスガラアジ）。新進気鋭の武闘派集団黒薔薇。紆余曲折を経た歴史を持ち他の人々から尊敬を込めて呼ばれる数々の技を持つ部族連合（トライブ）。そして、決して他人の葬儀は受けぬ（絶対死なない）という気概で挑む葬儀屋商会（アンダアテイカア）。これらが入り乱れる競争を裁くのは只事ではなかった。セスは王と共にこの大仕事を成功させた。小生はこの争奪戦の後半を国王、セスと共に仕切れたことを誇りに思う。最期の決勝戦はさながら一幅の絵画のようで、何れ劣らぬ選び抜かれた手練が持てる秘術の限りを尽くして戦った光景は忘れることが出来ない。

セスは儀式魔術の達人であり、「プルウグ戦役（クリスタルクエスト）」での集中力に見る如く大技に優れている。しかし実戦の場に於ける戦闘魔導師（バトルメイジ）としての技量や戦術眼については批判もあり大魔導師（グランドウイザアド）と称するにはいささか異論もあろう。彼はそれを自覚していたと想う。それが本書（トオム）序章の「貴殿の瞼（まぶた）に映る我（われ）が意気盛んな若者と観えたとしても愚かなりと責めぬことを望む。」という記述に繋がっているのだろう。

さて、このようにして我々の生きたオベリンの最初の世界は終末を迎えた。そして今また新たな世界が形作られつつあり最初の開拓者（プリベータ）の募集が締め切られたとの報せが届いた。いつの日にかまた再びその世界で諸兄とお会いできることを夢見ている。

では、また会おう！

浪人某（Ronin X）
王立通訳
マリレンジヤアズ



絵師アツチカによる訳者近影

註：翻訳について
訳出するにあたっては基本的に文語体を試みましたが、所々口語体が入り交じった不完全なものになっています。これはこれ以上文語体にすると英語と同じくらい分けがわからなくなってしまうためです。原文は故意に古めかしい入り組んだ言い回しを用いて難渋に書かれていますが、これは多くの叙事詩に見られる筆致です。今回はその雰囲気を少しでも伝えるため文語体にしましたが、平易な書き方でこれを訳すと非常に間の抜けたものになります。ご要望があれば現代語訳（？）も考えます。

私はとりわけ英語が得意なわけではなく、ましてやネイティブでもなければ外国に住んでもいるわけでもないので、皆さんが主としてアメリカ人の早口に「難しい、分からない」と感じた時には私も「参ったなあ」と感じています。ただ、今回のように翻訳するということであれば、英語もさることながら日本語をどのくらい使えるかということも等しく重要であるということを感じました。出来れば、読んでいただく際には原文と合わせて読んで欲しいと思います。一層興味深く読んでもらえると想います。

参考文献：
セスのトオム原文
http://www.oberin.com/end017/
今回訳出した内容の原文であり対照して読まれるべき第一級資料。必読。

ラグナロクの予言と魔導師評議会（ソオサラアズカウンシル）創設時の勧誘（テロン）
http://www.freethinkerssociety.org/ragnarok/
解説内にも引用したラグナロクのテロンが魔導師評議会（ソオサラアズカウンシル）に勧誘される場面もここから参照することが出来る。また最初のペイジの予言に関する記述は必読。

魔導師ラジヤによるプルウグ戦役、グレイル戦役他に登場する人物の解説
http://olive.zero.ad.jp/r2matou/obe_top.html
http://olive.zero.ad.jp/r2matou/m_person.html
オベリン世界で最も完備した生物／怪物／人物の解説文献を有する。
特に魔導師評議会（ソオサラアズカウンシル）構成員に関する記述は必読。

女王レイエル派と王統派（イアンズ・ファクション）の戦いとその顛末については以下に大僧正オイオイ和尚が絵詞を交えて書き記している。ベインがドミヌスを拉致する下りの記述もある。必読である。
http://oberin.s7.xrea.com/kiso/
http://oberin.s7.xrea.com/kiso/rtq020902/index.html